

タイトル	車持千年の難波従駕歌
著者	村山，出
引用	北海学園大学人文論集，17：A23-A41
発行日	2000-11-30

# 車持千年の難波従駕歌

村山 出

## 一 はじめに

車持千年の作と明記されているのは長歌二編（6・九一七～九、6・九三二～二）であるが、笠金村歌集の短歌四首（6・九五〇～三）にも異伝作者として名があげられている。それにして歌数は少なく、詠出の場も行幸先の吉野と難波に限られている。一般的に笠金村や山部赤人ら宮廷歌人と一緒に考えられているものの、その中でも特殊なあり方を見せているように思われる。

千年の従駕歌の第一作は養老七年（七二三）五月に元正女帝が吉野に行幸した折のもので、その意義については既に「車持千年の吉野讚歌」（『北海学園大学 人文論集』13号、平成11年7月）に述べた。

第二作は神亀二年（七二五）一〇月の聖武天皇の難波宮行幸

の時のもので、この時は笠金村・山部赤人と一緒に詠出している。翌三年一〇月に聖武天皇はさらに播磨国印南野に行程を伸ばし、その帰途に難波宮に寄っている。この折には印南野で金村と赤人の二人が従駕歌を披露しているが、千年の歌は残っていない。千年は従駕しなかったのであろうか、或いは従駕しながらも歌を作らなかつたのであろうか不明である。もし後の場合であれば、千年の作歌の意義は詠出の場が吉野と難波に限られていることにかかわると言えるであろう。

本稿では神亀二年の難波宮従駕歌について検討したいと思う。

## 二 難波宮従駕歌群

『続日本紀』によると、聖武天皇は神亀二年（七二五）一〇月

一〇日に、即位後初めて難波宮に行幸している(ただし還幸の記事はない)。さらに翌三年一〇月七日に播磨国印南野に行幸し、一九日に帰途難波宮に至り、二六日に式部卿従三位藤原宇合を「知造難波宮事」に任命し、二九日に難波から還都している。宇合はいわゆる後期難波宮造営の責任者に任命されたのである。この難波宮造営は天平初年まで継続し、天平六年(七三四)九月には官人に難波京の宅地が班給されている<sup>①</sup>。

千年の歌の検討に先立って、三人の歌をあげておく。

冬の十月に、難波の宮に幸す時に、笠朝臣金村の作る歌一首并せて短歌

おしてる 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の  
思ひやすみて つれもなく ありし間に 続麻なす 長柄  
の宮に 真木柱 太高敷きて 食す国を 治めたまへば  
沖つ鳥 味経の原に もののふの 八十伴の男は 廬りし  
て 都成したり 旅にはあれども (6・九二八)

反歌二首

荒野らに里はあれども大君の敷きます時は都となりぬ

(九二九)

海人娘女棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに楫の音聞こゆ

(九三〇)

車持朝臣千年の作る歌一首并せて短歌

鯨魚取り 浜辺を清み うち靡き 生ふる玉藻に 朝なぎ  
に 千重波寄せ 夕なぎに 五百重波寄す 辺つ波の い  
やしくしくに 月に異に 日に日に見とも 今のみに 飽  
きたらめやも 白波の い咲き廻れる 住吉の浜  
(6・九三二)

反歌一首

白波の千重に来寄する住吉の岸の埴生ににほひて行かな

(九三三)

山部宿祢赤人の作る歌一首并せて短歌

天地の 遠きがごとく 日月の 長きがごとく おしてる  
難波の宮に 我ご大君 国知らすらし 御食つ国 日の御  
調と 淡路の 野島の海人の 海の底 沖つ海石に 鰈玉  
さはに潜き出 舟並めて 仕へ奉るし 貴し見れば  
(6・九三三)

反歌一首

朝なぎに楫の音聞こゆ御食つ国野島の海人の舟にしあるらし (九三四)

千年の歌の位置づけと意義を考えるために無視できないのが金村以下の三人による歌群をどう把握するかという問題である

う。

問題の第一は、歌群の配列にどのような意味が考えられるかという点である。

珍しく宮廷歌人三人が顔ぶれを揃えて詠出した歌群は、金村・千年・赤人の順に配列されている。この配列に作者達の何らかの立場・位置づけを想定する説がある。

早くに風巻景次郎氏は三人に官職位階の順位か、もし同格の者同志であれば年齢的な長幼の順か、あるいは歌人としての名声ないしは活躍上の経歴に長短があつたと推定された<sup>②</sup>。

最近伊藤博氏は金村が一番先輩で宮廷歌人の第一人者と目されていたらうとされ、三人の順は彼等の出自氏族の宮廷における勢力によるとも推定されている<sup>③</sup>。

これに対して、史学の立場から、仁藤敦史氏は律令官制に「宮廷歌人」の職掌がないことから、笠・車持・山部の三氏は輿輦・先駆・蓋笠・食事などの職掌に関与した負名氏として行幸時に近侍した(歌は余技)と指摘された<sup>④</sup>。

梶川信行氏も万葉歌人は実態として律令歌人であつたから、笠氏は弓箭の家、車持氏は輿輦の家、山部氏は門衛の家としてそれぞれが行幸に従駕するにふさわしい伝統の家柄で、金村・千年・赤人はいずれもせいぜい八位あたりを極官とし、從駕歌

人として活躍した頃は四〇歳代であつたと推定され、風巻氏が三人を「赤人派」と把握されたことを否定し、三人の從駕歌について難波宮讚美を前提とする連作説は成立しないとされた<sup>⑤</sup>。問題の第二は、これら三編の從駕歌の関係をどう考えるかという点である。

三人の歌の順を年齢、階級、作歌の優劣によると見ることに否定的な久米常民氏は、この歌群を三人の連作の順と考えられ、特に反歌に於て、金村が、楫の音に海人船の出漁を想像したことが、赤人の歌の、海人らの天皇への奉仕の伏線になっていることを考えると、ぴったりと呼吸のあつた作歌であつた<sup>⑥</sup>。と主張された。

清水克彦氏は慎重に連作と言うことを避けて、分担作歌説をとられ、

金村はまず長柄の宮を中心とした難波の都に対する都ぼめの心を歌い、千年は住吉の浜の景を、赤人はおなじく住吉の浜における生産のさまを歌っている。

と関連する作とみられた<sup>⑦</sup>。

清水氏説を継承された伊藤博氏は、金村は長歌と第一反歌は陸地を歌い、第二反歌で対比的に海上を歌うことによつて、「八

十伴の緒」と「海人娘子」が大君を圍繞して奉仕する様を表現しており、千年の歌群は金村の第二反歌を受けて海への関心を延長して深め、赤人の歌群も金村の第二反歌を意識して詠んだもので、千年の歌も赤人の歌も、金村の歌を原点として導かれていると説かれ、歌の性格については、金村の歌は「構図が大柄で、全体難波への総括的な国ぼめ」であり、千年の歌に「住吉の浜への執心を述べることを通しての讚美」を認め、赤人の歌は「三人の歌群の中で最も讚歌らしい讚歌」で淡路の「奉仕のさまを具体的に述べることで、金村の総括的な国ぼめへと帰っていく姿がある」とされ、これらすべてに讚美の心を認められて、「当代宮廷歌人が主題を分担して織りなした一連の作」とされた。<sup>⑧</sup>

これに対して、分担作歌説に批判的な坂本信幸氏は、金村の作では天皇と我を含む八十伴の緒、千年の作では我、赤人の作では野島の海人を行為主体として歌が詠ぜられている。

と歌の詠じ方や何を中心主体とするかに相違があること、さらに、先の詠者とは異なる内容を詠むのが歌人たる彼等の工夫の一つでもあったと指摘される。<sup>⑨</sup>

また、連作説に批判的な梶川信行氏は金村の歌を難波宮讚歌

と見ることに疑問をもたれ、この行幸と難波宮造営の事実とは別に、公式的な天皇讚美ではなくて行幸先の旅情を表現したもので、荒野の難波の再発見と旅の夜の感慨を、味経宮の夜宴で「八十伴の緒」たちの前で披露したと推定され、千年の長歌には国見者としての天皇の姿はなく、〈叙景〉に永遠性の言挙げもなく、国土のあり得べき姿も歌わず、自分の目に映った「住吉の浜」の美しさを歌ったのみで儀礼性は認められず、反歌は都人好みの風流の遊びの表現で、宴席で披露された《遊び》の要素の強い作品であり、唯一讚歌性の強い赤人の歌も、難波宮に対するよりも住吉大社の神事に関わる表現とされた。<sup>⑩</sup>

連作については、高野正美氏が「通常一つの主題をめぐって数首の歌が有機的、組織的に配列されたもの」と指摘された通りであるが、「具体的な連作の認定をめぐっては見方によって相違する」と付言されたように、主題にともなう付帯条件をどこまで認めるかによっても分かれるであろう。主題に一貫性がある場合も主題の発展や視点の変化等の展開のしかた、主題にかかわる場や素材における転換等をどこまで許容するかが明らかにならなければ、連作について賛否を決めがたいことになろう。

ただ、前年の神亀元年一〇月の紀伊国行幸の従駕歌の場合、笠金村の相聞長歌「神亀元年甲子の冬の十月に、従駕の人に贈

らむために娘子に誂へられて作る歌一首并せて短歌」(4・五四三〜五)と山部赤人の儀礼長歌「神龜元年甲子の冬の十月の五日に、紀伊国に幸す時に、山部宿祢赤人の作る歌一首并せて短歌」(6・九一七〜九)が別の巻に分けて収められているのに対して、当面の歌群の場合は三編が一括して収められている事実も注意しなければならぬであろう。それにしても、三人の歌はどのような関連性をもつのか、あるいは全く関連性がないのかは作品の内容に即して考えねばならない。

### 三 金村の従駕歌

金村の長歌は、難波の国が古びた里として世人が無関心でいた間に、長柄の宮に真木柱を太く高くしつかりとお建てになつて天下をお治めになるので、従駕の官人は味経の原に宿つて都をなしている、旅ではあるが、と述べている。

この中で特に「続麻なす 長柄の宮 真木柱 太高敷きて 食す国を 治めたまへば」の歌句の意味について、窪田空穂氏は「古への長柄豊碕宮を御改築になったことである」と注されたが、吉井巖氏は「宇合を造宮の長官に任じたのは、この行幸の翌年だが、すでに造宮の開始があったという認識が金村たち

に」<sup>⑬</sup> あつたと指摘され、井村哲夫氏も「葦垣の 古りにし里と人皆の 思ひやすみて」いたという難波の地へのひさびさの行幸は、たぶん翌年から始まる難波宮(後期難波宮)新造宮の下検分をかねていたのでであろうと言われる<sup>⑭</sup>。最近では梶川氏がこの難波宮行幸は前年の天皇踐祚大嘗祭に引き続き八十島祭に関わる行幸の可能性を認められるが、金村らの従駕歌の成立は翌年からの難波宮再建のための事前の視察と、難波宮の守護神住吉大社への祈願を考えるべきだとされたのは重要な指摘である<sup>⑮</sup>。氏は別に、この歌句は「宮讚め」の一般的な表現であるとされて、

たとえ事実としてはどんな仮小屋であろうとも、天皇の行在所であるならば、そううたわれるべきものなのであり、当時実際に「真木柱」を「太高敷」いた難波宮であつたかどうかは、別の問題である。

と説かれたのは妥当であろう<sup>⑯</sup>。しかし長歌の結句の「旅にはあれども」は条件を表しているのであつて、長歌の主意は天皇が行幸し従駕の大宮人が宿るとそのまま都を成しているところにある。

そして第一反歌の

荒野らに里はあれども大君の敷きます時は都となりぬ

(九二九)

については諸説でしばしば言及されるように「壬申の年の乱の平定まりし以後の歌二首」の

大君は神にしませば赤駒の腹這ふ田居を都となしつ

(19・四二六〇) 大將軍贈右大臣大伴卿

大君は神にしませば水鳥のすだく水沼を都となしつ

(19・四二六一) 作者未詳

と対比的に見られるが、そのみでなく、

娘子らが続麻懸くといふ鹿背の山時しゆければ都となりぬ

(6・一〇五六) 田辺福麻呂歌集

も合わせて参考にすべきであろう。

壬申の乱後の歌二首は、「神たる天皇の意志によって」不可能と思われた場所に都を実現したという天皇即神思想に立つ賞讃の表現である。対して田辺福麻呂歌集歌は「思いがけなく時が訪れて」都が実現したことに対する驚嘆によって讚美の心を表現したものであって、金村の第一反歌はこれと同じ趣旨の表現と見るべきであろう。

聖武天皇は皇太子時代の養老七年(七二三)五月に吉野行啓、翌神龜元年即位後の三月に吉野宮行幸、同年一〇月に紀伊国行幸、神龜二年五月(ただし続紀に記事なし)の吉野宮行幸に引

き続いて、このたびの一〇月の難波宮行幸となった。

難波宮は遠くさかのぼる仁徳天皇時代の高津宮の所在は未詳であるが、孝徳天皇が大化元年(六四五)一二月に遷都した難波長柄豊碕宮は、天武天皇の時に改築されたものの朱鳥元年(六八六)に焼失し、その後再興された難波宮も誇張はあろうが「荒野」と表現されるような衰微の様相を呈していたのであろう。

難波宮については、天武天皇が一二年(六八四)一二月一七日の詔で、

凡そ都城・宮室、一処に非ず、必ず兩參造らむ。故、先づ

難波に都つくらむと欲ふ。是を以て、百寮の者、各往りて

家地を請はれ。

と難波を副都とすることを宣言した。中国的な陪都制度を採用し、家地が班給されているのでこの時点で難波京が設立していた可能性があるとみられている<sup>18</sup>。聖武天皇は天武天皇の意志を受け継いで難波宮を副都として新造営を企図したのである。それは、日本に先んじて律令体制をとった新羅が百済を滅亡させて国内統一を強化し、外交関係に緊張をはらむ状況の中で、筑紫においても神龜元年に神功皇后のみたまの香椎廟(筑前国)が創建され、翌二年には宇佐八幡宮に神功皇后の子応神天皇を祭る一之御殿が造営されるという状況と関連する決断であった

と思われる。このたびの行幸はこうした対外的施策としての副都造営計画をもつてのもので、井村氏がいわれるように下檢分の意味があつたに違いない。この天皇の決断は世人の預り知らぬことであつたであろうし、そのような世情を金村は「おしてる 難波の国は 葦垣の 古りにし里と 人皆の 思ひやすみて つれもなく ありし間に」と表現したのであろう。金村は志貴親王挽歌(2・二三〇〜二三四)において、親王の薨にかかわつた人物と事情を知らない人間を対照的に登場させ、對話を通して悲傷事を明かすという劇的な表現手法を用いているが、この場合も劇的とは言えないものの事情を知らない「人皆」は無関心であつたが、天皇の企図は從駕した大宮人の知るところであつたという対照的な状況に立つて表現していると見るべきではないのか。その両者の差、「古りにし里」と「都」の差の大きさ、つまり「古りにし里」を「都」に大きく轉換するといふことが賞讃を効果的にすることになる。

前年一〇月の紀伊国行幸の例によれば、離宮を造営するが、一六日の記事には、

造離宮司と紀伊国の国郡司と、并せて行宮の側近の高年七  
十已上とに禄賜ふこと各差有り。

と記されている。この難波宮行幸の際にも、二一日の記事に

宮に近き三郡の司に位を授け禄賜ふこと各差有り。

とあり、単に行幸にともなう恩寵にとどまらず、難波宮造営への具体的な動きがあつたと考えられるであろう。

大宮人にとつて難波宮の造営は始動していた。しかし、行宮であれ、離宮であれ、副都であれ、天皇一行の主都からの移動は行幸であり、旅の性格をもつことは否定しえないのであつて、「旅にはあれども」という条件句は当然の表現であろう。そのことが「(廬して) 都なしたり 旅にはあれども」という長歌の結びとなつたのであり、この「都」と「旅」の両側面が、第一反歌の「都となりぬ」、第二反歌の「旅の宿り」の表現を導いたのである。

そうとして第二反歌はどのように位置づけられるのか。

海人娘女棚なし小舟漕ぎ出らし旅の宿りに楫の音聞こゆ

(九三〇)

は楫の音を耳にして棚なし小舟の漕ぎ手を何故「海人娘女」と表現したのであろうか。第三歌群の赤人作歌の反歌も同趣向の表現が見られるが、

朝なぎに楫の音聞こゆ御食つ国野島の海人の舟にしあるらし(九三四)

と船の漕ぎ手を「海人」と表現しており、金村が「海人娘女」

と限定したのが特殊であろう。清水克彦氏はこの点に触れて

金村は海人娘女のいない海浜の景に興味を示してはいないのだ。吉野従駕歌の「泊瀬女」をも加えて、金村には、旅先の女性への接近の欲望がかなり濃厚であったと考えられる。

と述べられた<sup>19</sup>。これをふまえて、皆川隆一氏は当時の宮廷人一般が共有していた享樂的感情を喜ばせるための虚構意識を金村は身につけていたのであり、「海人娘女」は「海辺の虚景」であったといわれる<sup>20</sup>。この指摘には賛成であり、それとともに想起されるのが「太上天皇(持統)、難波宮に幸す時の歌」と題して、同じ状況で置始東人・高安大島・身人部王・清江娘子等四人によつてなされた共作である。旅と家をめぐつて交互に「国讚め」と「国偲ひ」の発想にもとづく歌で応酬展開した中の第二首、旅にしてももの恋しきに(鶴が)音も聞こえずありせば恋ひて死なまし(1・六七)

高安大島

は、旅先で家妻に恋い焦がれている時に、都人も周知の土地の名物の鶴が音を聞くことによつて十分に慰められたと表現したもので、「国偲ひ」の心情と土地の景物が競り合うようにして「国讚め」へと転じられた例である。

この金村の第二反歌も、「旅の宿り」で従駕の人びとを家郷思

慕へと誘うような「楫の音」を、「海人娘女棚なし小舟漕ぎ出らし」という虚構の景を提示することによつて土地の魅力へと転じたもので、「国偲ひ」の心情を従駕の人びとの趣向に訴えて「国讚め」に転換したと解すべきではないのか。

このように見てくると、金村の長歌は実質的に難波宮新造営が緒についたといつてよい行幸において、世人は予想だにしないかった「葦垣の古りにし里」で「続麻なす 長柄の宮に 真木柱 太高敷きて 食す国を 治めたま」うことになり、「味経の原に もののふの 八十伴の男は 廬りして 都成した」と、「旅にはあれども」都の繁栄を予祝したのであり、第一反歌は思いがけない時が至つて荒野が都になったと、造営に着手する(そして現実には虚の景である)。「都」を予祝讚美し、第二反歌は従駕の人びとの憧憬を誘う海浜の景によつて、「旅」の土地を讚美したと解されるのである。金村の歌はやはり難波宮の予祝讚歌と見るべきであろう。

#### 四 赤人の従駕歌

金村と後述する千年の従駕歌については諸説の見解がわかれるのに対して、赤人の従駕歌については最も従駕讚歌らしい作

という評価で一致していると言つてよいようである。

赤人の長歌の主意は、永遠に大君は難波宮に国をお治めになるらしい、御食つ国の日毎の貢として淡路の野島の海人たちが舟を並べて潜水しては鮑玉を採つてお仕えしている貴いなりわいを見ると、と述べ、反歌では、朝凧に梶の音が聞こえる、それは奉仕する野島の海人の舟らしい、と述べる。

長歌の冒頭部「天地の 遠きがごとく 日月の 長きがごとく おしてる 難波の宮に 我ご大君 国知らすらし」の最初の四句は、近くは神龜元年の伴旅人の未奏吉野讚歌(3・三一五)の「天地と 長く久しく (万代に 改らずあらむ)」と類似する。旅人の歌句については、清水克彦氏が聖武天皇の即位の宣命と、かつて聖武天皇の皇位継承を期待しつつ即位した元明天皇の宣命をも視野に入れつつ、その詞句を利用することによつて宣命に対する随順、新天皇讚美の心を表したと述べられたが、この赤人の歌句については、吉井巖氏が元明天皇の宣命の「天地と共に長く、日月と共に遠く(不改常典とたてたまひ)」の詞句を踏まえていると述べられた通りであり、これに継ぐ句で「おしてる 難波の宮に 我ご大君 国知らすらし」とこの地で天皇が永遠に天下を統治されるらしいと確実な推定を述べているのは、対外的な政治状況があつたのこととはいえ即

位の翌年に天武天皇の意志を受け継ぎ副都として造営の計画をもつてした新天皇の行幸を予祝讚美するにふさわしい表現というべきであろう。この予祝表現を支えるのが

御食つ国 日の御調と 淡路の 野島の海人の 海の底  
沖つ海石に 鮑玉 さはに潜き出 舟並めて 仕へ奉るし  
貴し見れば

という天皇の食材を献ずる国が天皇へ貢上する海産物として、鮑玉を淡路の野島の海人が潜水捕獲して奉仕する有様の表現である。「御食つ国 日の御調」という表現のつながりからいうと「鮑玉」は食料としての鮑がふさわしいように思われるが、「鮑にある真珠」とみる説もある。<sup>23</sup>

集中の当面歌以外の「鮑玉」の例は、

(1) 玉に寄する

伊勢の海の海人の島津が鮑玉採りて後もか恋の繁けむ

(7・一三三三) 作者未詳

(2) 紀伊の国の 浜に寄るといふ 鮑玉 拾ひにと言ひて

行きし君 いつ来まさむ(13・三二五七、左注)

作者未詳

(3) 紀伊の国の 浜に寄るといふ 鮑玉 拾はむと言ひて

妹の山 背の山越えて 行きし君 いつ来まさむと 玉

梓の道に出で立ち 夕占を 我が問ひしかば 夕占の

(四一〇四)

我に告らく 我妹子や 汝が待つ君は 沖つ波 来寄る

白玉 刃つ波 寄する白玉 求むとぞ 君が来まさぬ

拾ふとぞ 君は来まさぬ 久ならば いま七日ばかり

早くあらば いま二日ばかり あらむとぞ 君は聞こし

しな恋ひそ我妹(13・三三一八) 作者未詳

(4) 京の家に贈るために真珠を願ふ歌一首并せて短歌

大伴家持

珠洲の海人の 沖つ御神に い渡りて 潜き取るといふ

鰻玉 五百箇もがも はしきよし 妻の命の 衣手の

別れし時よ ぬばたまの 夜床片さり 朝寝髪 搔きも

梳らず 出でて来し 月日数みつつ 嘆くらむ 心なぐ

さに ほととぎす 来鳴く五月の あやめぐさ 花橘に

貫き交へ かづらにせよと 包みて遺らむ

(18・四一〇一)

白玉を包みて遺らばあやめぐさ花橘にあへも貫くがね

(四一〇二)

沖つ島い行き渡りて潜くちふ鰻玉もが包みて遺らむ

(四一〇三)

我妹子が心なぐさに遺らむため沖つ島なる白玉もがも

(1)は「玉に寄する」と題する譬喩歌で「鰻玉」は美女を譬え

る真珠。(2)と類歌関係にある(3)は「鰻玉」を「白玉」と言い換

えているのでやはり真珠。(4)の「鰻玉」は反歌に「白玉」とあつ

て、例外なしに「真珠」を意味している。そして「海神の持て

る白玉」(7・一三〇二)「海神の手に巻き持てる玉」(7・一三

〇一)とも表現されるように神授の玉としての信仰をともなう

効用が信じられていたようである。赤人の歌について言うと、

「御食つ国」として食材の「鰻」を潜水捕獲する技術をもつ「海

人」であるから、「鰻玉」(真珠)を採取し献上する任に当たつ

たであろう。

この真珠の「鰻玉」については梶川信行氏に詳細な説がある。

神功皇后伝承によると綿津見神が潮の干満を支配する「干珠」

「満珠」の呪力を用いて阿曇連が皇后の新羅征討を成功に導いた

とあり、赤人はこの歌で神功皇后伝承にもとづいて阿曇連の「野

島の海人」の「鰻玉」の献上を歌ったと推定され、そこに新羅

の脅威に対抗しうる鎮護国家の呪的儀礼的な意義をみようとき

れたのは重要であろう。この指摘によって「おしてる 離波の

宮に 我ご大君 国知らすらし」の意義が一般的な天下統治の

讚美ではなく、緊迫した対外関係への対応(外交的門戸である

筑紫の動向にも呼応)を含めて考えられることになった。

朝なぎに楫の音聞こゆ御食つ国野島の海人の舟にしあるら  
し(九三四)

は、金村の第二反歌と類似の発想を見せるが、坂本信幸氏は赤人の反歌は金村反歌に対して時間的な対比を表しつつ挨拶的な役割を果たす一方で、自分の長歌の視覚空間に対して聴覚空間を対比するという工夫をこらすことによつて海人の奉仕を多角的に表現して讃歌としていると赤人の創意を評価された<sup>25</sup>。加えて、赤人が金村の第二反歌と類想的な表現で「海人」の奉仕を讃美しているということは、金村の第二反歌が土地讃美のために、虚構の景として「海人娘女」を特に点出していることをも証することにもなる。

## 五 千年の従駕歌

(1)

以上に概略見てきたように、金村の従駕歌は天皇が古里で天下を統治されると都に成ると予祝讃美し、赤人の従駕歌は海人の奉仕の有様の中に天皇の永代統治を確信し予祝讃美として見ることができらるであろう。

では、その間に配置されている千年の従駕歌はどのように評価されるべきであろうか。窪田空穂氏は早くに「千年が初めて住吉の浜に立ち、…海珍しい心から感興に堪、その心を長歌型式をもつて詠んだものである。…心としては、純叙景のみをもつて一首としているところ、また感性の柔らかく細かいところも新しいものである。」と述べておられる<sup>26</sup>。

近年井村哲夫氏は「これまた純然たる行楽歌として、難波離宮行幸奉仕の長歌のパターンを外れ、離宮讃歌の埒外に立っている。千年作だけが前後の金村・赤人作とは別で、晴れの公開奏上の場をもたなかったという保証は全く無いのである。」と指摘され<sup>27</sup>、千年の歌を難波宮讃歌と見ることに疑問を投げかけられた。

これに対して、伊藤博氏は「住吉の浜への執心を述べることを通しての讃美であったと解せられる。だから、長歌は(反歌の訳は省略)反歌の心情にまっすぐにつながっていく。逆にいえば、名残惜しさをとどめて、反歌は反歌の働きを全うしている。」として、一群は金村の第二反歌(九三〇)のつながりとして海浜の歌に転じたもので、金村の歌群とは異なる場の住吉の浜で公表されたことを指摘し、「千年は、金村の九三〇の関心を延長し、深める意識のもとで当面の歌詠をなした」と指摘された<sup>28</sup>。

千年の歌を再掲して検討する。

鯨魚取り 浜辺を清み うち靡き 生ふる玉藻に 朝なぎ  
に 千重波寄せ 夕なぎに 五百重波寄す

辺つ波の いやしくしくに 月に異に 日に日に見とも  
今のみに 飽き足らめやも 白波の い咲き廻れる 住吉  
の浜(6・九三一)

反歌一首

白波の千重に来寄する住吉の岸の殖生にほひて行かな

(九三二)

長歌は「鯨魚取り」：五百重波寄す」の海景を叙する前段と「辺つ波の」：住吉の浜」の白波を賞美する後段に分かれ、前段の表現は、卷一三の作者未詳長歌や山崎馨氏が示唆された柿本人麻呂の石見相聞歌(3・一三二)の海景の表現に類似する。<sup>29)</sup>

鯨魚取り 海辺を指して 「和田津の 荒磯の上に」 か  
青く生ふる 玉藻沖つ藻 朝羽振る 風こそ寄らめ 夕羽  
振る 波こそ来寄れ (波の共 か寄りかく寄る 玉藻な  
す 寄り寝し妹を：)(2・一三二)  
続麻なす 長門の浦に 朝なぎに 満ち来る潮の 夕なぎ  
に 寄せ来る波の その潮の いやますますに その波の

いやしくしくに (我妹子に 恋ひつつ来れば：)

(13・三二四三) 作者未詳

景物の「玉藻」に共通性をもつ人麻呂の長歌と比較すれば、人麻呂の長歌には青く生える海藻に、朝風夕波が寄せてくるさまが叙せられ、波の動きのままに靡く玉藻の様相は比喻となつて寄り添い寝た妹を表出するが、この色彩鮮やかで力動感溢れる叙景に対して、千年の長歌前段の叙述は、清らかな浜辺にゆるぐ玉藻に寄せる朝夕の風の静穏な波は絶え間ないと、清浄静謐の海景を表現しているようで対照的である。人麻呂の歌に学ぶところがあつたとして、卷一三の長歌のように朝夕の風に限定したのは『延喜式』(治部省条)に示されるような祥瑞思想が念頭にあつたのではないかと考えることも可能であろう。祥瑞思想によれば、「海水不揚波」とあり、海は穏やかなのが「大瑞」とされる。「不揚波」の波がどの程度をいうのか明確でないものの風の穏やかな波は該当するであろう。さらに、集中の「千重波」「五百重波」の例について見れば、

a 比喻として

一日には千重波しきに思へどもなぞその玉の手に巻きか  
たき(3・四〇九) 大伴駿河麻呂  
：障みなく 幸くいまさば 荒磯波 ありても見むと

百重波 千重波しきに 言挙げす我は 言挙げす我は

(13・三二五三) 柿本人麻呂歌集

沖つ藻を隠さふ波の五百重波千重しくしくに恋ひわたる  
かも (11・二四三七) 作者未詳

春草の繁き我が恋大海の辺に行く波の千重に積もりぬ

(10・一九二〇) 作者未詳

み崎廻の荒磯に寄する五百重波立ちても居ても我が思へ  
る君 (4・五六八) 門部石足

b 実景として

名ぐはしき印南の海の沖つ波千重に隠りぬ大和島根は

(3・三〇三) 柿本人麻呂

ま幸くて妹が斎はば沖つ波千重に立つとも障りあらめや  
も (15・三五八三) 作者未詳

比喩の例のうち「千重波しきに」「五百重波千重しくしくに」

は波が間を置かずに頻繁に寄せ来る動きを時間的継起的にとらえて比喩とし、「波の千重に積もりぬ」「五百重波立ちても」は波が重なり或るいは波が立つ動きを重層的・立体的にとらえて比喩としている。

実景の例は海路の旅にともなう心情を誘う情景で、「沖つ波千重に隠りぬ」は重畳する波に隔てられた思慕を、「沖つ波千重に

立つ」は危険に対する畏怖を喚起している。

表現技法の上で比喩と実景の違いはあるが、「波」が「積もる」「立つ」「隠る」というのと、千年の長歌の「千重波」「五百重波」の「寄す」には違いがある。

千年の長歌の後段は叙景的な前段を受けて「辺つ波の いやしくしくに」と比喩に転じるのは卷一三の長歌と同様であるが、係恋の情に向かわずにひたすら波に思いが向けられ、波を賞美する心を頻繁に月日を重ねて見ても飽きることはなく、今だけでは満たされないほど深いと、しき波が寄せ白波が花と咲きめぐる住吉の浜の美観への強い傾倒執心を表現する。

「白波の い咲き廻れる」については同様な表現例として  
今替わる新防人が船出する海原の上に波なききそね

(20・四三三五) 大伴家持

泊瀬女の造る木綿花み吉野の滝の水沫に咲きにけらずや

(6・九一二) 笠金村

のように海の「波」や滝の「水沫」について「咲く」と述べた例は僅かながら認められるが、「白波を … 廻らす」という表現で注目される歌がある。

羈旅の歌一首并せて短歌

海神は くすしきものか 淡路島 中に立て置きて 白波

を 伊予に廻らし 居待月 明石の門ゆは 夕されば 潮  
を満たしめ 明けされば 潮を干しむ 潮騒の 波を畏み  
淡路島 磯隠り居て いつしかも この夜の明けむと さ  
もらふに 寐の寝かてねば 滝の上の 浅野の雉 明けぬ  
とし 立ち騒ぐらし いざ子ども あへて漕ぎ出む 庭も  
静けし (3・三八八)

反歌

島伝ひ敏馬の崎を漕ぎ廻れば大和恋しく鶴さはに鳴く

(三二八九)

右の歌は、若宮年魚麻呂誦む。いまだ作者を審らかにせず。

右の長歌によると、白波も、潮の干満も海神の靈妙な力の現れと信じられており、それに対する畏敬の心情があったことが知られる。このような海に対する感じ方は表現の規模には大きな差はあるものの中国文学においても通ずるところがあるように思われる。直接的影響関係を考えているわけではないが、木玄虚の「海賦一首」(『文選』卷第十二)の中に、

於廓なる靈海、長く委輸を為す。其の広為る、其の怪たる、宜なり其の大為る。爾して其の状為る、則乃ち激湍激瀨として、天を浮かべて岸無し。沖融沈漬、渺瀰炭漫。波は連

山の如く、乍ち合ひ乍ち散ず。百川を嘘噓し、淮漢を洗滌す。広鳥に襄陵し、溲瀉浩汗たり。

と述べ、自然の海の計り知れない不思議な変化の様態に対する驚嘆と畏怖を「靈海」と表現するところに共通するものがある。

日本の神話に波が神霊をもたらすという信仰が認められる。周知の、大国主神の国作りを助けた神産巢日神の子の少名毘古那神は、

大国主神、出雲の御大の御前に坐す時、波の穂より、天の羅摩の船に乗りて、鵝の皮を内剝ぎに剝ぎて、衣服と為て、帰り来る神あり。(『古事記』上卷)

と伝えられているのもその一例である。吉井巖氏は赤人の玉津嶋讚歌(6・九一七)の中の「白波さわき」の注に、伊藤博氏の宮廷讚歌で「さわく」は躍動をあらわす讚美の言語とする説(「赤人の長歌と反歌」『万葉集の表現と方法 下』)を紹介されつつ、豊玉姫が子を産むために彦火火出見命(「妾必ず」風濤壮からむ日に海辺に出で到らむ」と告げた言葉や(『日本書紀』神代卷下)、神倭磐余彦の命を受けた天の日別の命に伊勢国の神伊勢津彦が国を献上して退去する意志を示した言葉(「吾は今夜」八風を起し海水を吹き波浪に乗りて東に入らむ。此は吾が却る

由なり。」(『逸文伊勢国風土記』)を上げ、若宮年魚麻呂誦詠歌(3・三八八)にも触れて、「白波さわき」を単なる叙景表現とみることはできないと説かれたところに従うべきであろう。<sup>⑩</sup>

千年の歌の詠出の場住吉の地には航海守護、国家鎮護の神として信奉される表筒男、中筒男、底筒男の三神に神功皇后を合わせた四柱の鎮座する住吉大社が海に向かって西面しており、この神域の前面に展開する住吉の岸に絶え間なく寄せては白波を咲かせ続ける海の景にのみ目を向けた表現は叙景に似て単なる叙景にとどまるものではなからう。後期難波宮造営が実質的に始まっていたこのたびの行幸は、対外関係をめぐる政治的状況も考慮されるべきであり、前述したような筑紫における神功皇后・応神天皇の祭祀と呼応するものであるという視点に立てば、神功皇后を祭る住吉大社における祭儀もあつたはずであろうし、こうした背景があつての千年の歌の詠出と見るべきではあるまいか。西方の彼方筑紫に向かう住吉大社の前面に開ける海の景の表現は、しき波寄せる住吉の地の讚美にほかならないであろう。

この住吉の地における各種の歌(「住吉」の地名を含む歌に限って)は四一首検出できるが、その中の

住吉の沖つ白波風吹けば来寄する浜を見れば清しも

(7・一一五八) 作者未詳

住吉の岸の松が根うちさらし寄せ来る波の音のさやけさ

(7・一一五九) 作者未詳

の前者は「白波」の寄せ来る住吉の浜を視覚的に「すがし」と見、後者は「波の音」を聴覚的に「さやけし」と聞いて、いずれも讚美の心を表現したもので、例えば

若狭にある三方の海の浜清みい行き帰らひ見れど飽かぬかも(7・一一七七) 作者未詳

大海の磯もと揺り立つ波の寄せむと思へる浜の清けく

(7・一二三九) 作者未詳

等の湖畔や海浜の讚美と同じ主意による「土地讚め」の歌であり、千年の長歌もこの主題の系列にあるというべきであろう。

(2)

反歌の

白波の千重に来寄する住吉の岸の殖生ににほひて行かな

(九三二)

には類歌がある。

太上天皇、難波の宮に幸す時の歌

草枕旅行く君と知らませば岸の殖生ににほはさましを

(1・六九) 清江娘子

(天平六年) 春の三月に難波の宮に幸す時の歌六首

馬の歩み抑へ留めよ住吉の岸の埴生にほひて行かむ

(6・一〇〇二) 安倍豊繼

摂津にして作る

めづらしき人を我家に住吉の岸の埴生を見むよしもがも

(7・一一四六) 作者未詳

馬並めて今日我が見つる住吉の岸の埴生を万代に見む

(7・一一四八) 作者未詳

の四首はいずれも旅の歌で、このうち前の二首は行幸従駕の時のものである。「摂津にして作る」の前者は音に聞く名物を見たという強い願望を述べ、実見した感動を繰り返し味わいたいという讚美を「国讚め」の発想に立って述べている後者はそのまま従駕歌に通じる表現になっている。

実際に従駕の時の作と知られる二首は、「住吉の岸の埴生」に「にほふ」ことに注意がある点で、当面の反歌と類同的である。この場合の「埴生」に限らず、「にほふ」は例えば

二年壬寅に、太上天皇(持統)三河の国に幸す時の

歌

引馬野にほふ榛原入り乱れ衣にほはせ旅のしるしに

(1・五七) 長意吉麻呂

笠朝臣金村、伊香山にして作る歌

草枕旅行く人も行き触ればにほひぬべくも咲ける萩かも

(8・一五三二) 笠金村

紀伊国にして作る歌

玉津島磯の浦廻の真砂にもにほひて行かな妹も触れけむ

(9・一七九九) 柿本人麻呂

等のように、「榛」「萩」「真砂」に關しても用いられ、旅における「土地讚め」の表現となる。意吉麻呂の歌は「旅のしるしに」と表現するところは風雅なわざと見られるが、その根底に感染呪術的な信仰をもつものである。この時の行幸は一〇月一日から一月二五日にかけて実施されているので、実際には散り残った榛の林を見ていたのではないかと推測されている<sup>1)</sup>。美しい黄葉の榛原という虚景を幻想してでも詠出するところに「土地讚め」の意義があつたであろう。安倍豊繼の「住吉の岸の埴生にほひて行かむ」の表現は同じ意義に出るものであつた。「にほふ」には、別に、

紅に衣染めまく欲しけども着てにほはばか人の知るべき

(7・一二九七) 作者未詳

我が待ちし秋萩咲きぬ今だにもにほひに行かな彼方人に

(10・二〇一四) 作者未詳

等のように恋・逢会を比喻する場合もあつて、清江娘子の歌の「岸の殖生にははさましを」は「土地讚め」の発想に立つ点は同様であるが、恋をほのめかすところに趣向があつた。

千年の反歌は安倍豊継に先立つ例となるが、「白波の千重に來寄する」を「住吉」に冠していることの意義は前述の通りであろう。

## 六 むすび

千年の歌の叙景的な表現は遊覽性を強く見せるが、「朝なぎに千重波寄せ 夕なぎに 五百重波寄せ」「白波の い咲き廻れる」と波に集中して讚美を感覺的に表現したように見えるのは、ほかでもない「住吉の浜」に寄せ来るしき波に海神の靈妙な力の寄与を感じて（あるいは願つて）のことだったのであり、神靈の祝福を得て難波宮造営が成就し繁榮することを予祝する心から出たものであろう。

養老七年の元正女帝の吉野行幸は、翌年に聖武天皇の即位を控えてのものであつたが、笠金村の献上した從駕歌は元正から聖武へと皇位が受け継がれ、天皇が万代にわたつて天下を統治する吉野宮を讚美し祝福する儀礼歌であつたが、千年の献上し

た從駕歌は藤原不比等ゆかりの車持氏出身の人間として、聖武即位に尽力しつつもその時を見ずに世を去つた不比等と元明女帝を偲ぶ元正女帝の心を代弁した儀礼歌と見ることができるとでないかと考えた<sup>22</sup>。

そして、この神龜二年の難波宮の行幸從駕歌においては、難波宮の再興が實質的に始動しつつあつた時期に、待ち望まれた男性天子聖武天皇が対外情勢との関連で即位後最初の国家的事業に着手するに当たつて、神靈のしき波寄せる住吉の浜の讚美を通して、金村・赤人らとともに讚歌を献上したのであつた。車持氏の千年にとっては、聖武天皇の事業を「知造難波宮事」として推進するのが不比等の第三子式部卿從三位藤原宇合であることに格別の意味があつたと思われる。

車持千年の從駕歌が吉野宮と難波宮に限定されていることの意味の一斑は、やはり藤原氏と車持氏との関係にあるのではないかと考えられる。

『公卿補任』や『尊卑分脈』に藤原不比等の生母が車持君国子の娘与志古娘とあるのによれば、不比等は貞慧の同母弟ということになるが、『帝王編年記』には天智天皇の皇胤とも伝えてゐる。天智天皇が懷妊中の与志古娘を鎌足に与え、その子が不比等であつたとする伝えは後に摂関家の遠祖と仰がれる不比等を

血筋の上で権威づけようとした後代の作為とする見解もある。<sup>①</sup>

天智天皇の皇胤という伝えが後代の作為であるとして、不比等の生母が車持氏出身の女性であったと伝えられた点までも否定できるであろうか。その出自と名が伝えられているところに何らかの根拠があったと考えられるのであり、車持千年は輿輦の家柄としての職務による従駕のみならず、藤原氏との縁故によつて従駕歌を詠出する機会を得たと推定する。

藤原不比等の生年は斉明天皇四・五年(六五八・九)と見られ、没年は養老四年(七二〇)であつて、千年が吉野宮従駕歌を詠出した養老七年(七二三)は没後三年、当の難波宮従駕歌を詠出したのはさらに二年後のことである。

不比等は大宝律令の制定、平城京の造営等の政治的功績をあげ、軽皇子の養育にあつて後宮で重きをなしていた県犬養三千代と結婚して後宮への影響力を強め、娘の宮子や三千代との間に生まれた光明子を通じて天皇家との姻戚関係を結ぶことによつて権臣としての地位を築き、王権との身内的結合を強化し、やがて王権の側からも准皇親化を認められようとしていた。<sup>②</sup>そのため重要な意味をもつ宮子所生の首皇子即位の矢先に、不比等は薨じている。しかし、この間に不比等の子の四卿は政界で重要な地位を占め、その動静に政治的社会的には違う世界に

身をおく千年であつても藤原氏のゆかりとして類縁的な親昵の情を寄せていたであろう。千年は宮廷歌の場に加わる機会を得て、吉野宮行幸の従駕歌においては故藤原不比等と故元明女帝への追懐思慕の情を表現し、難波行幸の従駕歌においては不比等の第三子宇合がたずさわる難波宮造営の予祝を表現するといふ、藤原氏にかかわつて吉野と難波における従駕歌の詠出となつたと思われる。

藤原宇合は「難波の京を改め造らしめらゆる時の作歌」と題する歌を誇らかに表現している。

昔こそ難波田舎と言はれけめ今は都引き都びにけり

(3・三二二)

## 注

(1) 詳細は岸俊男氏「難波宮の系譜」『日本古代宮都の研究』昭和63年

(2) 「山部赤人」『風巻景次郎全集』3『昭和44年

(3) 伊藤博氏『萬葉集釋注』三『平成8年

(4) 仁藤敦史氏「古代王権と行幸」『古代王権と祭儀』平成2年

(5) 梶川信行氏「聖武朝前期の《宮廷歌人》たち」『万葉史の論』山部赤人』平成9年

- (6) 久米常民氏「笠金村とその歌集」『万葉集の文学論的研究』昭和45年
- (7) 清水克彦氏「養老の吉野歌」『萬葉論集 第二』昭和55年
- (8) 伊藤博氏 (3) に同じ。
- (9) 坂本信行氏「山部赤人―難波宮從駕作歌をめぐって―」『論集万葉集』昭和62年
- (10) 梶川信行氏「『荒野』の賑い―難波宮從駕歌―」『万葉史の論笠金村』昭和62年
- (11) 梶川信行氏「難波宮の再建と『野嶋の海人』―難波宮從駕歌の論―」『万葉史の論 山部赤人』平成9年
- (12) 高野正美氏「連作」『上代文学研究事典』平成8年
- (13) 『窪田空穂全集 第一五卷 萬葉集評釋III』昭和41年
- (14) 吉井巖氏『萬葉集全注 卷第六』昭和59年
- (15) 井村哲夫氏『万葉の歌 人と風土5大阪』昭和61年
- (16) 梶川信行氏 (11) に同じ。
- (17) 梶川信行氏 (10) に同じ。
- (18) 岸俊男氏「日本都城制総論」『日本の古代9 都城の生態』昭和62年
- (19) 清水克彦氏「笠金村論」『萬葉論集 第二』昭和55年
- (20) 皆川隆一氏「海人―海辺の景の疑問―」『古代文学講座6 人々のざわめき』平成6年
- (21) 清水克彦氏「旅人の宮廷儀礼歌」『萬葉論集』昭和45年
- (22) 吉井巖氏 (14) に同じ。
- (23) 土屋文明氏『萬葉集私注 第六卷』昭和28年
- (24) 梶川信行氏「『野嶋の海人』と『あはび珠』―再び難波宮從駕歌の論―」『万葉史の論 山部赤人』平成9年。
- (25) 坂本信幸氏 (9) に同じ。
- (26) (13) に同じ。
- (27) 井村哲夫氏「車持朝臣千年は歌詠みの女官ではないか」『赤ら小船 万葉作家作品論』昭和61年
- (28) 伊藤博氏 (3) に同じ。
- (29) 山崎馨氏「笠金村と車持千年」『萬葉集講座 第六卷 作家と作品II』昭和47年
- (30) 吉井巖氏 (14) に同じ。
- (31) 伊藤博氏『萬葉集釋注 一』平成7年
- (32) 拙稿「車持千年の吉野讚歌」『人文論集』第13号、平成11年7月
- (33) 上田正昭氏『藤原不比等』昭和61年
- (34) 倉本一宏氏『奈良朝の政変劇 皇親たちの悲劇』平成10年